

One purpose

FOR BETTER COMMUNICATION



同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

特集

新しい学びのかたち

～キャンパス整備事業の今～

●同志社人訪問

京都ユースホステル協会 プロジェクト担当理事

高田 光治さんに聞く



『ONE PURPOSE』は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。

※今号に登場する学生の学年は取材時によるものです。



特集

新しい学びのかたち ～キャンパス整備事業の今～

ゼミ探訪 学びの時間

社会学部 社会福祉学科 空閑 浩人ゼミ

同志社の研究は今

微粒子科学技術研究センター 日高 重助 理工学部教授

同志社創立135周年記念「東京新島講座」

CAMPUS NEWS

土屋和雄理工学部教授が「はやぶさ」プロジェクトチームで朝日賞を受賞／「同志社キャンパスフェスタ」を全国7会場で開催／メジャーリーガー・西岡剛選手が来学！／特定寄付奨学金募金協力者ご芳名／新任教員紹介／退職教員／本学教員執筆図書紹介

留学生紹介

ケリー・ダニエルさん(文学研究科 国文学専攻 博士課程(前期課程))

INTERVIEW ～同志社人訪問～

京都ユースホステル協会 プロジェクト担当理事 高田光治さんに聞く

MY JOB, MY LIFE ～シリーズ 私と「仕事」～

・野原 拓也さん(2005年工学研究科電気工学専攻博士課程(前期課程)修了)
・谷岡 史子さん(2002年法学部政治学科卒業)

ANNOUNCEMENT

MY PURPOSE

独学で絵画を始め、数多くの展覧会で入賞～たくさんの人に愛される絵を一生描き続けたい～
澁谷 侑希さん(文化情報学部2年次生)



表紙の情景 [今出川新棟建設予定地と講武館]

同志社中学校の岩倉移転に伴い、その用地に建設が予定される今出川新棟。南側で発掘調査が続く中、北側では建築作業が開始されており、今後の進捗が楽しみだ。

その後ろに見える2階建ての白い建物は1967年に竣工した講武館。旧講武館は柔剣道場として中学校テニスコート付近に1916年に建設され、1950年に現在の位置へ移築された。約10年後に運動部が新町校舎に移るまでの間、柔剣道以外にもボクシングや空手、フェンシングなど、同志社スポーツの練習場として利用された。現在の講武館は様々な用途を経て、授業教室や大学院生の研究室を主な機能としているが、今出川新棟完成後の2013年夏に撤去される予定だ。その姿を見ることができるのも、あとわずかである。



特集

新しい学びのかたち

〓キャンパス整備事業の今〓

同志社大学では現在、「今出川校地と京田辺校地における教学体制の再構築」を根幹とする中長期計画に沿って、2013年度をゴールとするキャンパスの整備・再編事業を展開している。従来の今出川、京田辺2校地で展開してきた学びのかたちは、今出川キャンパスが文系学部、京田辺キャンパスが理系および文理融合学部の拠点となる新たな形態へと変わる。2004年にスタートした改革は、現在最終フェーズに入っており、特に今出川キャンパスでは教育効果をさらに高めるため、学習空間の再設計を狙った新施設の建設が進んでいる。八田英二学長へのインタビューを軸に、教学体制の再構築に向けたキャンパス整備事業の今を伝える。

1876年9月 現在の今出川キャンパスに竣工した同志社英学校初の専用校舎



1897年頃の同志社(男子部)集合写真

八田英二学長に聞く

「同志社2000年の大計」に向けて

「キャンパス再編の背景について

1986年に京田辺キャンパスを開設して以降、同志社大学は大きく今出川と京田辺の2校地を基本として、現在につながる教育体制を構築してまいりました。

京田辺キャンパスの新設は、教育ニーズの高まりとそれに伴う学生数の増加に対応するため、キャンパスの拡張を計画した当時、京都市内には適切な用地がなく、また当時のいわゆる工場等制限法により、市内では1,500㎡を超える大学の校舎の新設が規制されていたことが背景にあります。しかし2002年にその法律が廃止され、市内に新たな校舎を建設することが可能になったことに加え、京都市が産業技術研究所繊維技術センターの移転を計画、その跡地を譲り受けることが決定し、京都市内に学生を回帰させることができる外部環境が醸成されました。併せて、今出川キャンパス内の同志社中学校が2010

年秋、岩倉校地に移転し、その跡地を大学が利用できる内部環境が整いました。こうした内外環境の変化を受け、私たちはこの機会に教育・研究環境のさらなる充実を図

るため、今出川、京田辺両校地の再編を柱とした教学体制の再構築に着手しているのです。

「キャンパス再編の具体像は

従来、学部横割り型の教育を展開していた2校地体制では、大半の文系学部で1・2年次は京田辺、3・4年次は今出川と、学年の進行とともに通学する校地が変わるというデメリットがありました。再編計画ではこれを改め、学部教育を1つの校地で一貫させることで、より高い教育効果を得ることを目指しています。

具体的には、同志社中学校の跡地と繊維技術センター跡地に新校舎を建設し、文系学部の神、文、社会、法、経済、商、政策の7学部すべてが、今出川において1年次生から4年次生まで、一貫して教育・研究を行える体制を実現します。神学部と社会学部の1・2年次生、約1,000人はすでに今出川で学んでおり、2013年4月に残る文、法、経済、商学部が全面的に移転すると、合計約8,000人の学生が京田辺から今出川に移ってくることになります。

従来の横割り型ではなく、より理想に近い学部ごとの縦割り型による2校地体制となることによつて、キーワードで言えば、理系学部中心の京田辺は生命・先端技術、情報、文理融合、文系学部が集積する今出川は国際主義、リベラルアーツという言葉で彩られることになります。今後は両校地の違いを明確にしたうえで、それぞれの特徴を生かした教育を進めていきたいと考えています。

ひとつ課題を言えば、縦割りになることによつて、サークル活動以外には今出川と京田辺の学生が交流する場を失うということがあります。これに対しては、キャンパス間を行き来する無料シャトルバスの運行、体育関係の授業は学部を問わず京田辺で行うなど、大学側が積極的に交流する機会をつくっていく予定です。

「烏丸キャンパス」の位置づけは

繊維技術センター跡地を活用して新たに開設する「烏丸キャンパス」は、現存の大学院研究科のうち、総合政策科学研究科、グローバル・スタディーズ研究科そして

この4月に開設した国際教育インスティテュート、さらに2013年4月に14番目の学部として開設を予定している国際地域文化学部(仮称)の拠点となります。この新学部は、世界を大きくアジア、アメリカ、ヨーロッパの3つに分け、それぞれの地域の言語、文化を研究していくというものです。さらに既存の学部でも国際交流をより活発に進めていくことを方針としており、烏丸そして今出川キャンパスは本学の国際主義を象徴し、それを追いついていく国際交流の拠点として位置づけていきます。

また、京都は学生の文化が息づくまちであり、同志社は京都が発祥の地です。大学の都心回帰が進む中、京都市内に帰ってくる大学は同志社が初めてです。新たに建設する校舎は、周辺の都市景観や風土にふさわしい美観を保つことを基本に置いており、建物の高さは従来の繊維技術センターと同じで、既存の桜を残すなど地域の景観にも配慮しました。また、中庭としてサンクンガーデンを設けるなど、上京区をはじめとする周辺住民の皆様にもご利用いただけるキャンパスとしています。烏丸キャ

ンパスは、市民に親しまれる大学、学生のまち・京都を牽引する大学としての象徴的存在となつていきます。

「目指す教育の方向性は

同志社大学は2004年の政策学部開設以降、教育組織の増設というハード面の改革に取り組んできました。これらは①1学年1,000人を超える大規模学部の再編②これまで本学になく、社会的ニーズが高まっている教育・研究領域への進出③専任教員数の増員による教員1人あたりの学生数の是正——という既存の教育組織の再編を伴いながら、学生とのFace to Faceの教育を目指した対応であり、決して量的規模の拡大のみを目指したものではありません。教学体制の再構築も、単なる校地・施設の整備だけに終わらせては、教育・研究の質的向上は望めません。したがって私たちは、ハード面の整備と並行してソフト面の充実とその抜本的改革にも取り組んでいます。その教育改革の積み重ねの結果が、同志社大学の多くの特色ある取り組みに対する、文部科学省の大学教育改革支援事業（GP）への採択であり、それがさらなる改善の原動力となつて好循環を生み出しています。今後は、「国際化拠点整備事業（グローバル30）」に採択された大学としての責務を果たすためにも、新島の導きによって豊かな国際性を育んできた同志社の国際化をさらに追求し、世界的教育研究拠点を目指してまいります。

「教育改革の今後について

大学には2つの社会的使命があります。1つは言うまでもなく、最先端の知識を教授すること。もう1つは人間としての人格形成を行うことです。2校地体制を推進することによって、同志社大学の学生、卒業生としてのアイデンティティの確立が新たな課題となつていますが、本学では開校以来、キリスト教主義に基づいて人格形成の教育を行ってきた歴史があります。今後はアイデンティティの確立、人格形成において、キリスト教主義を基盤とした徳育教育を一層強化していきたいと考えています。その意味でもこれから本学で学んでいく学生たちには、知識を蓄えるだけでなく、1人の人間としての基礎力、コミュニケーション力、創造力、いわば人間力を身に付けていただきたい。そのために大学として

最善の環境をつくりあげていきたいと思っています。

同志社大学が現在展開している中長期計画に沿った教育改革は、まさに「同志社建学ルネサンス」と呼ぶにふさわしいものです。しかし、どのような改革を行おうとも、また、大学を取り巻く環境がいかに変化しようとも、同志社の建学の精神は新島の良心とも謂うべき人物「良心を手腕に運用する人物」という「良心教育」から変わ

あつた勝海舟に「大学の完成には200年を要する」と述べています。私たちは「同志社大学200年の大計」に向けて、これからも揺

るきない教育理念「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」に基づく「良心教育」を継承し、未来を担う人物の育成に努めてまいります。

新しい学びの場所へ 新キャンパスの概要と特色



今出川キャンパス

同志社中学校移転後の用地に、教室、研究室、学生の自習室や福利厚生施設、ラーニング・コモンズなどを備えた新校舎。地下2階、地上5階、建築面積約8,000㎡、延床面積約4万㎡が、2012年11月に誕生する。啓明館を彷彿とさせる2つの塔が象徴的で、現在工事が進んでいる空間を埋めつくす壮大な建物だ。最大の特徴は、延床面積が約2,500㎡を超える日本の大学では最大級のラーニング・コモンズ。建物中央部分の2階と3階にかけて、「学生同士が交流して相互に啓発する空間」と「アカデミックスキルを育成する空間」が広がる。前者では、人と出会い、学びの多様さを知り、学びの相互啓発が行えるよう、大掛かりなセミナーやイベント開催デモを行う庭的スペース、ポスターセッションやワークシヨップができるエリア、グループ学習や懇談をカジュアルにできるコーナーが配置される。後者では、大学院生等の支援スタッフから、情報検索方法、日英両言語のライティングといったスキル、プレゼンテーション技法、ブレインストーミング等のスタディスキルの指導を受けるエ

リア、プロジェクト活動で活用できる学習空間が設けられる。同志社大学では課題探究・解決型学習を行うプロジェクト科目が充実しており、ラーニング・コモンズは、その実践の場として活用されることが期待される。

また、ゼミナールを中心とする文系学部専門教育を展開する今出川校地のコンセプトを実現するため、ゼミ教室や小教室を集中的に配置したフロアも用意される。いくつかの教室は、同時通訳ブースを備えた国際学会や講演会等にも対応できる仕様で、通常とは異なる雰囲気での授業を体験できるだろう。

その新校舎と既存建物のリニューアルによって、より効率的な活用を行っていく今出川キャンパス。そこでは、2013年4月から文系学部の神、文、社会、法、経済、商、政策の7学部すべて、1年次生から4年次生まで、一貫して教育・研究を行う体制が実現し、大学院生も含めて合計約20,100人の学生が学ぶことになる。学生数の増加に備えて、新校舎の地下1階は、食堂やコンビニ、書籍、

文具、トラベルコーナーが集まる福利厚生ゾーンとなる。さらに、キャンパスへの「足」となる京都市営地下鉄は、増加する学生数に対応して、今出川駅北改札口と新校舎とを直接結ぶ連絡通路が設けられる予定だ。環境、景観に配慮した取り組みも、新し

くなる今出川キャンパスの特色の1つ。新施設は、省エネルギー設備の採用、地熱や雨水・井水など自然エネルギーの活用、自然採光・自然換気などによる自然の快適性の積極的利用によって、環境に配慮しながら快適な居住環境を実現する。さらにその建物は、高さを京都市の基準よりも抑え、キャンパス内の重要文化財・登録有形文化財との調和を図ったデザインとし、景観保全に努める。また、烏丸通と大学との境界には、従来の高い石塀ではなく、沿道からキャンパス内部を眺望できる低い縦格子フェンスを設置。新しく生まれ変わる烏丸通沿いの景観は、まさに地域と共生する開かれた同志社大学の姿を映し出す。

今出川新棟建設予定地





再整備により文系7学部が集結する今出川キャンパスと、「国際主義」に基づいてグローバルな人材を育成する新たな教育拠点・烏丸キャンパス。それは、「大学のまち・学生のまち」京都を象徴する同志社大学の新しい学びの場所。

烏丸キャンパス

2010年10月、京都市から産業技術研究所繊維技術センターの移転跡地を譲り受け、敷地面積約7,700㎡の「烏丸キャンパス」を新たに開設する。烏丸上立売に設けられる今出川キャンパスの北門から約150m北に位置するその新キャンパスには、教室、研究室、自習室、福利厚生施設に加え、ラーニング・スタジオを備えた新施設(地下1階、地上3階、延床面積約1万6,800㎡)を建設。「1000年建築」を想定し、建物のコンクリート強度や被り厚を十二分に確保、また将来の変化に対応できるように素材選びや設計が施されているなど、未来を見据えた計画の周到さが伺える。ここでも、建物の高さを繊維技術センター研究棟と同レベルに抑え、地域の景観保全に配慮するほか、建物内部にサンクンガーデンを造成し、上京区の周辺地域住民に開放した空間として位置づける。

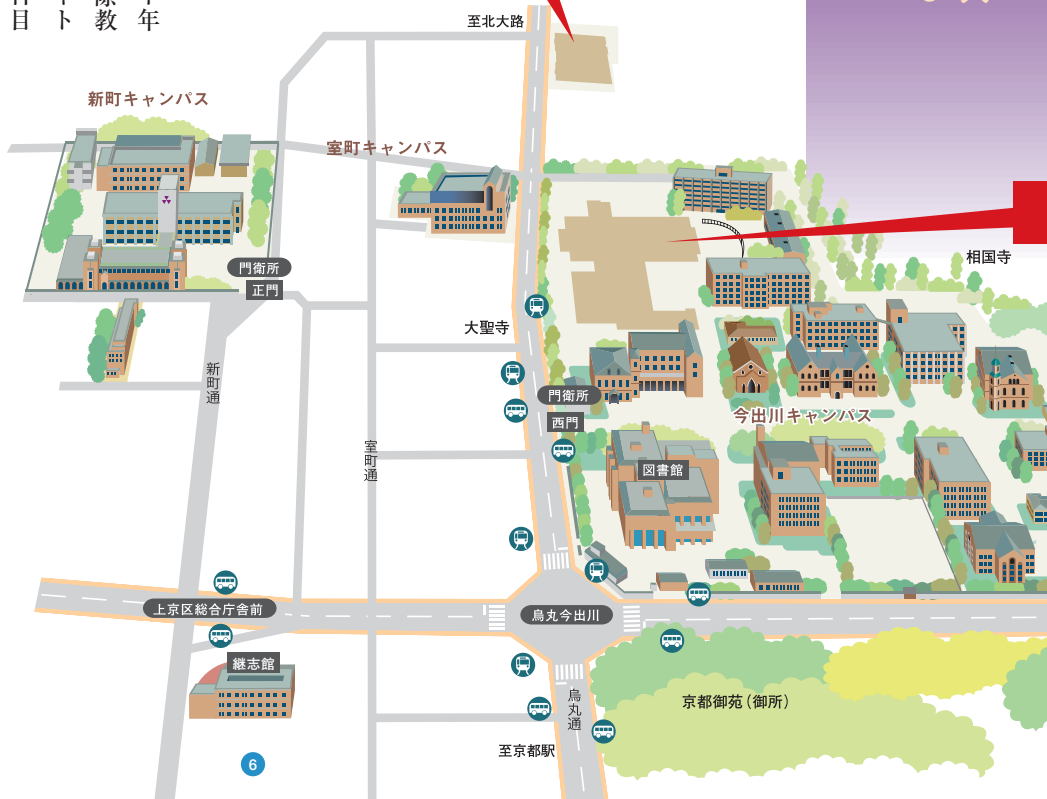
烏丸キャンパスが担うのは、同志社の教育理念の1つである「国際主義」のシンボルとしての役割だ。そこには、大学院の総合政策科学研究科とグローバル・スタ

ディーズ研究科、本年4月に開設した国際教育インスティテュート(英語による授業科目の履修のみで学士学位が授与されるコース)、さらに2013年4月開設予定の国際地域文化学部(仮称)を置く。まさにグローバルな視点で国際教育を推進する拠点だ。

これら2つのキャンパスに新町、室町キャンパスを加えた烏丸今出川界隈は、ま

さに大学のまち京都を代表する学生街になるだろう。また、国際的なキャンパスと千年の都である地域とが融合し、世界都市京都を代表するエリアとなることも期待される。

烏丸キャンパス建設予定地





京田辺キャンパス

1986年、関西の文化・学術研究の一大集積地、関西文化学術研究都市の一角を占める京田辺市に開校した「京田辺キャンパス」は、なかなか丘陵地に79万㎡もの広大な敷地を有する。京都市内とは趣の異なる歴史・文化が色濃く残る一方、研究都市の1エリアとして、最先端の学術研究施設や企業、研究者が数多く集まる立地。2006年に同研究都市内の木津川市に開校し、医工連携を中心とした研究が活発な「学研都市キャンパス」と有機的に連携し、「Creative Hill」のコンセプトに違わないキャンパスを形成している。

その特徴は、何といっても施設設備面だ。開校当初から充実した環境が整っていた理工学・心理学関連の各種実験設備に加え、夢告館、医心館、磐上館には、それぞれ拠点を置く学部・研究科の領域に応じた最新の設備と機器が揃う。同志社ローム記念館、情報メディア館などには大規模な情報教育設備も備わっている。また、キャンパス西側には伸びやかな環境を利用した、デイヴィス記念館（総合体育館）をはじめとした各種スポーツの競技場・練習場、合宿施設も用意されており、その充実ぶりが同

志社スポーツの活躍を支えている。

2013年4月には、教学体制の再構築により、文、法、経済、商学部の1、2年次生の勉学校地が今出川キャンパスに移行。京田辺キャンパスを構成する学部・研究科は、本年4月に開設したグローバル・コミュニケーション学部を含め、文化情報学部・研究科、理工学部・工学研究科、生命医科学部・研究科、スポーツ健康科学部・研究科、心理学部・研究科の6学部5研究科となる。理工系と文理融合学部が集積する「実験・実習・フィールドワーク」を重視する複合的教育拠点、および「身体・生命、先端技術、情報」に関する国際的先端研究拠点として、新たなスタートを切る。

豊かな自然と文化的財産に囲まれ、アカデミズムと地域社会が交流する開放感にあふれたこの環境で、学生たちはじっくりと学問に取り組む、新たな可能性を拓く高度な専門能力を備えた人材として社会に巣立っている。今出川とは異なる、特色と魅力を持つ京田辺キャンパス。その躍動感にあふれる展開が指し示すのは、これまで以上の輝きを放つ同志社の姿だ。

多々羅キャンパス

2010年9月、京田辺キャンパス近郊の旧京都厚生年金休暇センター（ウェルサンピア京都）跡地に開校。外国人留学生と外国人教員・研究者の宿泊施設としての機能を備え、同時に本学学生や地域住民による国際交流事業を展開している。また体育館、テニスコート、ゴルフ練習場、多目的グラウンドなどの各種スポーツ施設を擁した、課外教育活動の拠点ともなっている。今後、ますます重要性が高まるキャンパスとなるだろう。



今蘇る中世／今出川キャンパス埋蔵文化財発掘調査

室町時代、第3代將軍・足利義満が創建した京都五山の1つである相国寺が広がっていた今出川キャンパスは、千年の都を象徴する由緒ある地。キャンパス整備に伴い同志社中学校が移転した跡地では、大規模な埋蔵文化財発掘調査が行われた。調査によって発見された遺構・遺物や明らかになった歴史的事実について、歴史資料館の浜中邦弘准教授(考古学)に伺った。

■相国寺塔頭「鹿苑院」の遺構発見？

2012年11月完成予定の今出川キャンパス新棟建設に伴い、2010年8月16日から発掘調査を開始しました。今出川キャンパスは、永徳2年(1382)

に室町幕府第3代將軍足利義満によって創建された相国寺の旧境内に位置し、幕末には薩摩藩邸が造営されていたところにあります。そのため、発掘調査では主に相国寺に関する遺構・遺物が出土しました。

相国寺創建頃の主な遺構には、水路と道路が挙げられます。水路は南北方向に直線的に走り、幅10m、深さ1.4mにおよぶ大規模なものでした。もと

と自然流路であったものを傾斜面に礫をあしらいい、部分的に石垣を組むなど大規模に整備を行った様子が伺えるほか、堤上には道路状の礫敷遺構が検出されました。その他、礎石建物や溝・土坑など数多くの遺構が見つかっています。

遺物では、水路埋土から出土した底部に「鹿」と墨書された古瀬戸碗が注目されます。近世の絵図によれば、調査地南側には

「鹿苑院」という塔頭が存在していた

した。古瀬戸碗の「鹿」の文字は塔頭鹿苑院の「鹿」を示す可能性があり、鹿苑院が創建当初か

らこの近辺に存在したと推測できます。鹿苑院は足利義満の位牌が祭られ、中世禅宗

社会において権力を有した塔頭です。その一端が今回明らかとなったのです。

時代は下って、戦乱の世の幕開けともいえる応仁・文明の乱に相国寺は焼失したのですが、その再建の様子も明らかになりました。再建時、先ほどの水路は完全に埋められ、敷地全体が大幅に盛土造成されました。調査地南側では直径1mを越える掘り方で、柱の土台となる礎石を支える根固石を6カ所確認できました。柱間約4.5mを測り、掘り方・根固石の規模から重厚感のある建物が想定でき、瓦を葺く仏堂ではないかと考えられます。

さらに、桐の紋様を持つ15世紀の瓦が数多く出土しました。桐紋は後醍醐天皇から足利尊氏が下賜されたもので、足利將軍家が代々使用した家紋の1つです。足利將軍



家・相国寺にとって極めて意味のある瓦と考えられ、重要な建物が存在していたことが伺えます。

■今後、室町政権の有様が明らかに

調査区中央で見つかったのは、南北に走る断面台形の大溝(幅4m、深さ1.4m、長さ16m以上)です。時期は16世紀中頃で、天文20年(1551)細川晴元方が相国寺に陣をとり、三好方と戦った歴史的事件があり、溝の規模・形状などからその際に堀状施設として掘削された可能性がります。寛永

14年(1637)洛中絵図の相国寺境内の西限と一致するため、この溝の位置が相国寺境界線として引き継がれていくようです。また、その西端では石垣を両側に組んだ南北に走る溝(幅4.5m、深さ0.6m、長さ16m以上)が見つかりました。時期は15世紀で、この溝が16世紀中頃以前の相国寺境内西限を示す可能性が考えられます。

今回調査地点の西には將軍邸である室町第(花の御所)が存在し、発掘調査によってその一部が検出されています。今後、これらを含めて出土した資料を詳細に整理し、相国寺、室町第を含めた室町政権の有様を探っていききたいと思っています。なお、薩摩

藩邸についてはほとんど残っていませんでしたが、島津家の家紋入りの染付碗が出土し、その縁を知ることができました。

今回の発掘現場では多くの学生さんが発掘作業に携わってくださいました。キャンパス地下に埋没していた遺構・遺物に直接触れ、今出川キャンパスの歴史的重層性を少しでも感じてくれたことと思います。また、現地説明会には数多くの方々に来て下さり盛況でした。発掘期間中、大学関係者の方々からは多くの助けを得、より充実した発掘調査ができたものと思います。

発掘調査では膨大な遺物が出土しています。調査成果をまとめた報告書の作成が大きな作業として今後残っており、より良き成果として公表できるようみんな頑張っていきたいと思っています。



社会学部
社会福祉学科
空閑浩人ゼミ

現場での体験から自分で考え、 自分の言葉で表現する

障害、老い、介護、子育て、引きこもり、不登校、いじめ、自殺、虐待、孤独死、貧困……現代社会に深く根を張った社会福祉をめぐる諸問題について、学生たちがどう向き合っていくのか。自分1人だけではなく、「他者とともに、他者との対話を通して考える」のが空閑ゼミ。空閑浩人教授自身が社会福祉の現場を研究対象にしているため、現場に根ざした形で各々がそれぞれの

研究テーマに沿って研究を進めていく「社会福祉実践研究ゼミ」であることが特徴だ。3年次の実習科目で多くの学生は1カ月間、実際に社会福祉施設で現場を経験し、その成果を踏まえて研究に取り組む。その後4年次で再度実習に行くこともある。次の研究のステップアップのためにフィールドワークを行う学生もいる。「社会福祉の現場に身を置き、そこでの体験から自分の考えを導き出し、自分の言葉で表現してほしい」と空閑教授は言う。

欠席は基本的に認めない。それは就職活動のためであっても例外ではない。

「他の講義科目と違い、ゼミというのは私が教えるものではないと思っています。ヒントや材料は提供しますが、ゼミは基本的に自分たちで学び合う場所です。その場所を構成するためには1人ひとりが大事なメンバーですから、誰かがいなければそれだけ全員の学びが浅くなると考えてもらいたいです。自分の考えて

いることが意見交換することによってさらに深まっていく。そういう対話の中で自分の思考や考え方が成熟され、また色々なアイデアが浮かんでくる。このような経験をするのが毎週のゼミです。仮に仲が悪くても、同じゼミに所属するメンバーとしてきちんと意見を言い合い、それぞれ決められた役割を果たす。フレンドシップとメンバーシップは違うのだという意識を持って臨んでもらいたいです」

ゼミに集まった学生たちは十人十色。学びの動機も希望する進路も、それぞれ異なる。学生たちが語ってくれた言葉に、それははっきりと現れている。

社会福祉学を学びに選んだ動機から聞いていこう。大畑陽一さんは「人と話すのが好きなので、そういう機会が多い仕事に就けるような学科がいいと思った」。野中隆宏さんは「人と人のつながりが大事」と考え、別の大学から受験し直した。松浦礼佳さんはリウマチを抱える祖母との同居経験から、高齢者を支える制度に関心を持って社会福祉学科へ。「福祉教育が充実して歴史もあるので、同志社大学を選

空閑 浩人

【社会学部教授】





びました」。障害のある家族の存在で福祉を学ぼうと決めた船曳祐美さんは「入学してから、障害のこと以外にも様々な問題があると知り、それらに目を向けていなかった自分に気づきました」と話す。

卒業後、社会福祉関連の仕事を志すのは6人。川合香名子さんは母子生活支援施設への就職が決まった。その入所者は、自

身の研究テーマでもあるDV(ドメスティック・バイオレンス)の被害に遭った母子が多いのだという。吉田智子さんは病院の医療ソーシャルワーカーとして勤務することになった。「患者や家族の方々の生活に広く関わるソーシャルワークがしたい」と言う。今村藍子さんは知的障害のある子どもや大人への支援を行う施設に就職する。3年次の実習で知的



障がい児の通園施設に行き、子どもたちと過ごす時間がとても楽しく充実していた」というのが動機だ。佐藤雅穂さんは老人保健施設にソーシャルワーカーとして勤めることになっている。

「自分に親しみを持ってもらいたいし、自身もお年寄りに親しんでいける人間でありたい」と願う。一般企

業が運営する有料老人ホームで働くことが決まっているのは金村紗希さん。「最初は介護職から入り、その後はマネジメントの方向へ進みたい」と希望を語る。橋詰優美さんは精神科のある病院で、ソーシャルワーカーとして働くことを希望している。「精神障害の方の社会復帰に携わりたい。そう思うようになったのは実習での体験が大きかったです」と話す。また、教師を目指していた若松亜耶佳さんは福祉科のある高校で教鞭を執ることになった。

一方、福祉関係以外への就職を決めたのは7人。奥野翔太さんが選んだのは消防士だ。「この仕事も、市民の生活を支えることで社会福祉につながると考えています」。鎌田裕貴さんは「バリアフリーなどで社会に貢献していけたら」と、ビルやマンションのエレベーターの管理会社へ。川崎智也さ



んも一般企業に入るが「社会福祉学科で学んだことは仕事だけでなくプライベートでも活かせるはず」と言う。山上恵美さんは損害保険業界に。「福祉を学んで広い視野で物事を考えられるようになった」ことを活かしたいそう

うだ。自身、聴覚に障害のある鎌村香織さん

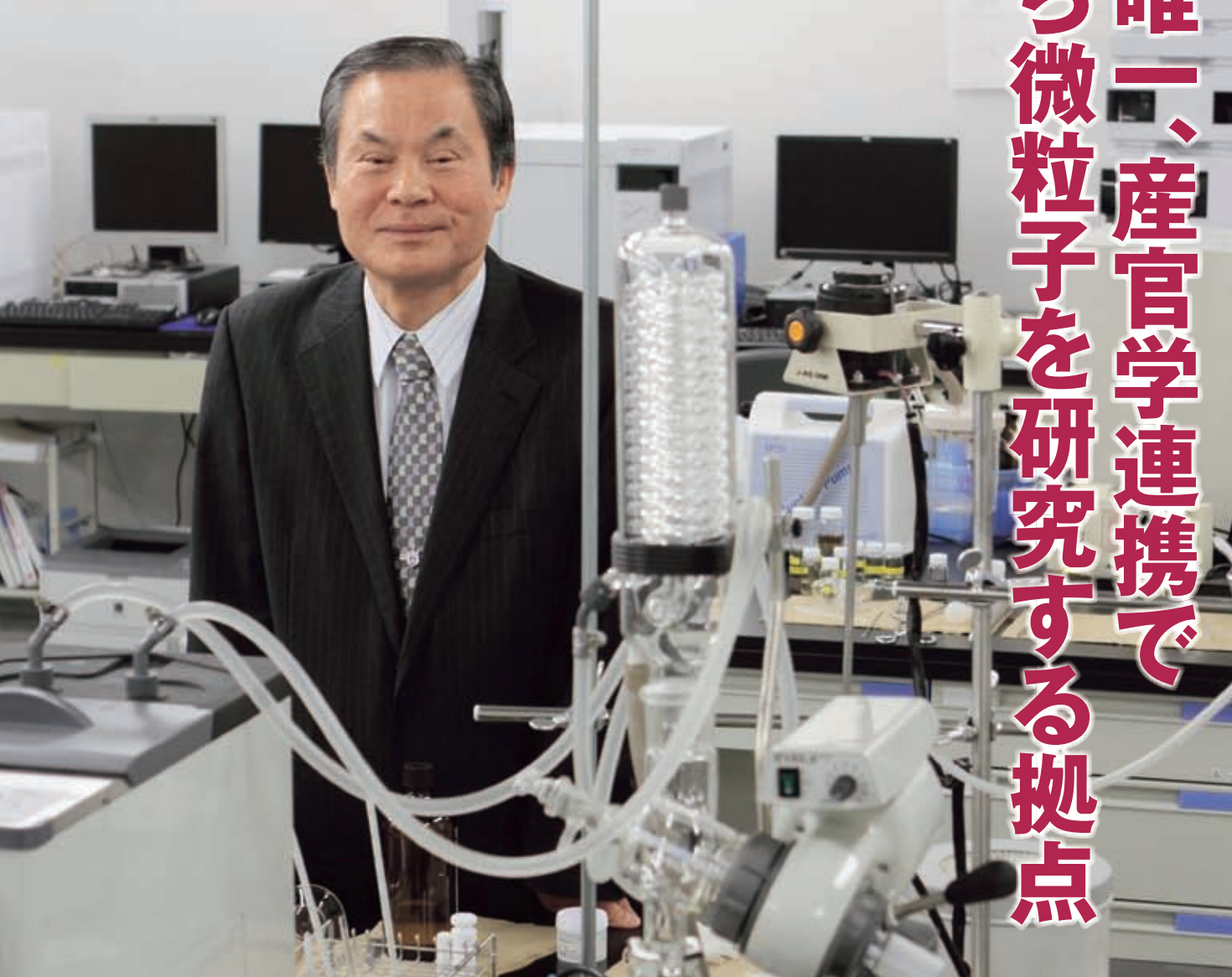
は「一般企業で働くことになりましたが、社会福祉学科で学んだことは、今後働く上でも活かせると思っています」。中学2年生の時に難聴になったという松岡史子さんは「片耳が聞こえにくくなっただけで生活が大きく変わり、周囲の支えの必要性や、自分が人にどういことをしてあげべきかを考えるようになりました」。卒業後は「自分が学んだことを伝えていきたい」とテレビ局で働くことになった。橋本二美さんも、「このゼミで人間としてとても成長できました」と語る。

「社会福祉学科で学んだことは福祉の分野だけでなく、他の分野の仕事の中でも、あるいはこれからの人生のあらゆる状況の中で、必ず支えになるはず」と空閑教授が言う通り、学生たちはそれぞれの道でこの学びを糧に新しい人生を歩いていく。



日本で唯一、産官学連携で 基礎から微粒子を研究する拠点

2006年11月、国家レベルの学術・研究機能が集積する関西文化学術研究都市の一角に、「学研都市キャンパス」がオープンした。そのおよそ1年半後の2008年5月、中核となる理工系研究施設「快風館」に、同志社大学と京都府の協力により、科学技術振興機構京都府地域結集型共同研究事業のCOE(センター・オブ・エクセレンス)として開設されたのが「微粒子科学技術研究センター」である。微粒子を利用した先進高機能材料の開発に必要な高機能微粒子と、その生産システムに関する研究を行う産官学連携の微粒子研究拠点としては、わが国で唯一。粉体工学分野では全国屈指の有力校である同志社大学から、微粒子の基礎研究とその成果を社会に発信するセンターの活動状況について、センター長を務める理工学部化学システム創成工学科の日高重助教授に伺った。



工学が目指すのは豊かで快適な社会を作ることですが、そのためには豊かな機能を持つ材料が必要です。便利で安全な生活を実現するために必要な新材料の開発は、これまで物質の化学構造を変えて新たな性質を発現させる方法を用いてきました。しかし粉体粒子を非常に小さくすると、同じ物質が未知の新しい性質を示すことが分かり、微粒子を用いて、化学構造を変えずに新しい材料を作る研究が、約10年ほど前から世界的に盛んになりました。粒子を細かくするだけで色々な機能が現れることは新材料の創成に大きなインパクトを与え、世界中で多くの微粒子研究施設が立ち上がりました。その流れの中で、今から8年ほど前、京都府と本学とで微粒子科学技術に関するプロジェクトの実施が決まり、ここ関西文化学術研究都市に研究センターを設置することになったのです。

当センターには大きく3つの役割があります。1つは微粒子工学の研究拠点として基礎研究を行うこと、2つ目は地域COEとして地域結集事業の成果を事業化すること、そして3つ目は具体的にわが国の産業振興に寄与するべく産学連携を図ることです。研究センター研究員は、本学の教員に加えて専属の研究員3人、研究補助員が1人。また全国の大学から微粒子研究に携わる18名の先生方を嘱託研究員に委嘱しています。

まず1つ目の基礎研究、微粒子工学基

[A]:大規模な微粒子シミュレーションを高速・大容量処理する粒子・流体解析用クラスターシステム

[B]:微粒子表面電位を微小な探針で走査し、三次元形状を高倍率で観察可能な走査型プローブ顕微鏡



の科学と工学の融合です。基礎研究に関しては現在、新しい機能を持つ微粒子の生成、その微粒子を材料にするために必要なプロセス技術の開発、それぞれの粒子が目的の機能を持っているかどうかの計測評価法の確立、この3つについて研究を進めています。現在進んでいる研究は、例えば燃料電池に欠かせない白金触媒粒子を作る方法。白金は高価で希少な物質ですから、有効に利用しなければなりません。そこで触媒活性が高い結晶構造の白金微粒子のみを選択的に合成する研究が行われています。その他、非常に高い磁性を持つ微粒子



[C]:微粒子材料の極微小領域の組織観察、化学組成分析が可能な電界放出型走査電子顕微鏡

盤研究は、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の一環として行っており、テーマは「先進微粒子材料

の合成や異なる化学物質を組み合わせる様々な機能を発現させる複合粒子の開発研究も進んでいます。高機能を発現する微粒子を目的の通りに集合させて先進機能材料を作る方法の開発も非常に大切です。非常に小さい微粒子がたくさん集まった微粒子材料では、材料の機能に大きな影響を与える粒子と粒子の接触面積が非常に大きく、材料の機能が微粒子の集合構造に非常に鋭敏です。そこで、微粒子の高度機能と粒子構造の関係、目的の微粒子材料構造を形成する微粒子技術の開発に必要なコンピュータシミュレーション技術を開発しています。粉体粒子の分野に関するシミュレーション技術はトップレベルにあると自負しています。

2つ目の事業化研究については、文部科学省地域イノベーションクラスター事業「京都環境ナノクラスター」の中で、新燃料生産用触媒技術の事業化に取り組んでおり、エネルギー分野で関心の高い電池材料とバイオディーゼルの新しい生産方法の開発を行っています。ここで開発した技術は、数年の間に企業で事業化することが求められています。

理工学部の研究センターであり、微粒子

技術の地域COEでもある当センターには、3つ目の役割である産学連携が非常に重要です。ひと言に産学連携と言っても、その実を挙げることはなかなか難しいものです。そこで本学と社日本粉体工業技術協会とが協力協定を結び、微粒子科学技術研究センターを粉体産業界の技術センターとすることにしました。その協力関係のもとに産業界の委託研究、共同研究、委託試験を行っています。さらに人材育成に関する講習会や講演会も実施しており、昨年は6日間わたって開催しました。本学の教員だけでこれらすべての活動を実施することは不可能ですので、前述のように多くの大学の粉体工学研究者を嘱託研究員にお願いしています。

同志社大学における粉体工学の研究は、この学問の草創期から盛んで、わが国でも屈指の実績を有しています。粉体工学の基礎研究とその成果を社会に還元するとは、この分野で歴史と実績を重ねてきた本学の責務でもあります。したがって、当センターをわが国唯一の微粒子研究センターとして確立し、有用な研究成果を本学から発信することは非常に大きな意義があります。新しい粉体工学と技術が求められる中、社会の要請に対して同志社大学の粉体工学研究がどのような答えを出せるのか、本センターの成果が期待されます。

当センターには3つの役割があると言いましたが、あえて言うなら、最も力を入れているのは1つ目の基礎研究です。粉体

工学と技術の土台であり、これがしっかりしていれば、2つ目の事業化研究も、3つ目の産学連携も順調に進みます。昭和30年代からのわが国の社会は急激な発展のために、様々な汎用材料を必要としました。そこで社会と研究者が求めたのは、「経済的で大量のモノ作りをする工学と技術」でした。このタイプの工学分野はすべて成熟し、現在新しい学問の展開が求められています。もちろん粉体工学：微粒子工学も例外ではありません。物の作り方に関する工学に加えて「何を作るか」に求められる工学でなければなりません。これからの社会が求める新しい機能を持つ微粒子材料はどういうものか、それを提案できる工学です。私たちの社会に必要な新材料を現代工学の方法により生み出す粉体工学を打ち出すことができれば、若い研究者にとって大きな夢が描ける学問分野となる。私は、粉体工学をそのように展開したいと思っています。

同志社創立135周年記念 東京新島講座

「日米中関係の展望」

村田 晃嗣 法学部教授

1992年のクリスマス、イギリスのエリザベス女王のスピーチ中で使われた「アナスホリギリス」とは、ラテン語で「ひどい年」を意味する言葉です。振り返れば、2010年は経済、政治、外交、安全保障においてわが国はもちろん、米中にとってもまさにアナスホリギリスでした。今年、そして来年以降、どうすればアナスホリギリスではなく、「アナスエスペランス」つまり「希望の年」となるのでしょうか。ここ数カ月の短期で見ると、わが国の政治の混乱は続き、経済も停滞、外交・安全保障でも国連安全保障理事会の常任理事国ではない日本の影響力は小さく、依然アナスホリギリスが続くでしょう。2012年までを視野に入れた中期では、アメリカとロシアで大統領選挙があり、中国では国家主席が交代します。韓国でも大統領が替わります。とりわけ東アジアにとって激動の年である2012年までに日本がどれだけ政治、経済、外交で安定を取り戻していただけるか。

それが中期的な日本の命運を左右することになります。

アナスエスペランスー希望の年の「希望」とは何でしょうか。アメリカの心理学者フロムは、希望を「普遍的に正しいことを実現可能な範囲で実現しようと努力し、準備するところに訪れるもの」としています。

いまだ40年後の2050年、この長期スパンで考えると、日本は人口が約2,000万人減り、労働人口はさらに減るとされています。逆にアメリカは約1億人増加すると予想でき、しかもそのすべてが労働人口。石油と並ぶ重要な天然資源の水を多く保有するアメリカは、当分世界一の大国であり続けるでしょう。一方、昨年GDPで日本を抜いた中国は、計算上ではあと15年でアメリカをかわして世界一になります。しかし大規模な少子高齢化は避けられず、経済成長にもブレーキがかかり、中国社会は大混乱に陥るでしょう。では、日本が中国のブラックホールに飲み込まれず、来年以降の

未来に希望を持つためには、どのような努力と準備をしておくべきなのでしょう。

1つは人材の育成です。希望と同様、優れた人材は待っていてもやって来ません。人材育成の重要性は、既に135年前に新島先生がおっしゃっていますね。2つ目はコミュニケーション能力の回復です。日本の政治が貧困になったのは、われわれ自身がコミュニケーション能力を失ったからにほかなりません。政治は、国民を映す鏡です。最後の3つ目は地方分権の推進です。現代よりはるかに分権的社会だった幕末には、多様性の中から多くの優れた人材が輩出されました。地方分権と人材の育成は表裏一体と言えるでしょうし、人材リーダーに最も求められている資質がコミュニケーション能力です。これら3つの大きな課題に今から備えることができれば、将来はアナスホリギリスの繰り返しではなく、アナスエスペランスの時代になるはずです。

未来に希望を持つためには、どのような努力と準備をしておくべきなのでしょう。



同志社創立135周年記念「東京新島講座」が2月12日、創立者・新島襄の生誕の地である東京都千代田区神田錦町（生誕当時は神田一ツ橋）の学士会館で開催された。当日は首都圏の校友・同窓等約160人が参加、大谷實学校法人同志社総長による開会の挨拶に続き、村田晃嗣法学部教授が「日米中関係の展望」、渡辺好章生命医科学部教授が「創造とプロデュース・テクノロジーの視点から」と題して、それぞれ講演を行った。（内容は要旨）

「創造とプロデュース

・プロデュース・テクノロジーの視点から」

渡辺 好章 生命医科学部教授

プロデュースの重要性は、人材育成にダイレクトに関わる点にあります。この視点が欠けていたため、わが国の今の混迷があるといっても過言ではないと思います。

戦後の高度成長、バブル崩壊を経て、日本社会は表面的には成熟期と呼ばれていますが。しかし、少子高齢化、雇用状況の悪化、若年層のニート・フリーター化に伴う格差社会の出現、アジア各国との国際競争力の激化など、様々な精神的不安が押し寄せてきています。これらを打破するためには、社会全体を動かすシステム、つまりOS（オペレーティングシステム）を根本的に見直さなくてはなりません。覚える「OSから」考える「OSへ変える」のです。その際、最も重要な要素は人です。資源の投入先をモノから人に修正し、人を財とする「人財立国」にする必要があります。創造的な知的人財立

国へ、これこそわが国が次に目指すべき方向です。

私はNPO法人プロデュース・テクノロジー開発センター代表として、プロデュースの本質の体系化を試みています。「テクノロジー」を冠したのは、工学の原点は再生産が可能であることで、体系化を実現すれば、プロデュースの再生産もできると考えるからです。多くのプロデューサーと呼ばれる方々にヒアリングを行い、その結果をもとに一連の流れをモデル化し、作成したのがプロデュース・テクノロジー（PT）チャート。プロデュースの流れを試行段階（フェーズA）、準備段階（フェーズB）、実行段階（フェーズC）に分けています。フェーズAでは、思いつきを大事にして、それを培養する場所を作る。フェーズBでは、思いつきを構想へ変えていく。フェーズCで、具体的なストーリーを作っ

て具現展開していく、という流れです。

何もない所から創造する、このベースがなければプロデュースは不可能です。いわば創造の人間力ですね。重要なのはまず考えることで、それによって普遍性や本質を追求でき、最終的に創造性への展開が可能になるのです。クリエイションにはトレーニングが不可欠です。考える癖をつけることで、様々な気づきが起こります。課題達成に伴う成功体験が増え、それが知的好奇心につながるのです。

ハリス理化学校の卒業生で、創造科学教育を提唱された加藤与五郎先生のお名前なくしては、創造について語ることはできません。先生の遺志を継ぎ、今も理工学研

究所を中心に毎夏、軽井沢で創造力を養う研修が行われています。その加藤先生の教え子で、現実に創造を産業化されたのが、半導体エネルギー研究所の山崎舜平氏。特許取得件数ではエジソンを抜いて世界一、ギネスブックにも載っておられます。考え、創造することでビジネスを作った、日本の生きる道の1つのモデルです。

新島先生がおっしゃった「自主・自立」、これはまさにプロデュースです。セルフプロデュース、すなわち自分をしっかりプロデュースすることができれば、自主・自立につながります。自ら考える力をつけ、考える能力を伸ばす。プロデュースの基本は考えること、これに尽きると思います。

